



営農ウィークリーNEWS

2025年産米の品質と検査概況について



2025年産米は、田植え後、短期集中型の梅雨となり比較的降雨量も少ない状況となりました。山間地などでは、「いもち病」の発生が見受けられたほか、梅雨明け後は、一気に天候も回復し、異常な高温と日照量が多い状況が続き、水稻の品質に最も影響する8月の登熟期は、近年の高温傾向を更に上回る災害級の状況となりました。

早生品種では、その影響により、昨年同様に白未熟粒（背・腹白粒）の発生が非常に多く品質を下げる要因となりました。

晩生品種の「ヒノヒカリ」も早生品種同様、

白未熟粒（背・腹白粒）の発生が特に多く発生し、50%以上が規格外に格付けされるなど、品質が著しく低下しました。

種子の確保が問題となっておりますが、品質を重視する場合は、登熟期の高温によるリスクを回避するため耐高温性品種「にこまる」への作付転換もする必要があります。

斑点米カメムシ類による着色粒（斑点米）の混入も近年の発生を上回る状況で非常に多く、気温が高い状況などからカメムシ類の好適状態となり活動が活発であったと思われます。また、イネカメムシの生息地域が拡大していることも要因の一つとなっています。

来年度に向け、病害虫防除対策をしっかりと行い、気象災害に負けない米づくりとして、堆肥や土壌改良材を施用し、土づくりを行い、良質米生産を目指しましょう。

—TAC information—

2026年肥料・農薬予約申込受付中!



2025産米の品質は、早生品種では、昨年同様に登熟期の高温による白未熟粒の混入が多く、「規格外」に格付けされるものも多くありました。

晩生品種で高温耐性品種の「にこまる」においても土壌条件や環境によっては、早生品種同様に白未熟粒の混入が多く検査の等級格付けを下げているものもありました。種子もみについては、昨年に続き全国的に高温耐性品種に切替が進み逼迫状態は、改善できない状況下にあります。

ご迷惑をお掛けしておりますが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

2026年も異常気象が想定されますので、土壌改良により地力の改善を図り高品質な産米づくりを目指しましょう。

